

藤女子大学 図書館 だより



Fuji Women's
University
Library

記念号

No.100
2021.4



1. もう一つの「図書」のこと
…………… 文学部長 名畑 嘉則
4. 藤女子大学図書館と私
… 日本語・日本文学科 漆崎 正人
4. 図書館だより100号にあたって
… 人間生活学科 Sr.木村 晶子
5. 教員著作紹介
6. 大学(藤学園)&図書館、
図書館だよりの歴史
8. さしんさん 誕生10周年!

CONTENTS



もう一つの「図書」のこと

文学部長 名畑 嘉則

「図書館だより」第100号の記念として、「図書」という言葉の背後に、実は古代以来の歴史を持つ、豊かな広がりを持った世界が潜んでいるということをご紹介してみたい。

現代の我々は「図書館」を利用し、「図書を閲覧する」だとか「図書を購入する」だとかいう風に、普通に「図書」という言葉を使っている。しかし、実は筆者が専門とする中国思想の世界では、「図書」というと、習性により通常の「本」とは違った別のモノを思い浮かべてしまいがちなのだ。

中国思想の世界で、というよりは、広く近代以前の東アジアの学問の世界では、と言い換えてもよいかもしれない。例えば、『日本国語大辞典』（通称「日国」）で「図書」を引いてみると、次のようにある。

- ①（「と」は「図」の漢音。「易経 - 繫辞上」の「河出図、洛出書」から）河図洛書のこと。
〔漢書 - 溝洫志〕

② 絵図と書物。多く、書物・書籍の総称として用いられる。ほん。ずしょ。〔広益熟字典（1874）〕
〔史記 - 蕭相国世家〕

②が現代でも普通に使う方の意味（ただし、典拠として挙がっている『史記』の時代には、冊子になった「本」はなく、すべて布か竹簡の巻物だったわけだが）。今回話題にしたいのは①「《河図洛書》の短縮語」の方である。この「河図洛書」とは一体何物なのだろうか？

「河図」と「洛書」というものが登場する最古の文献は、「日国」にあるとおり『易経』（「易」「周易」ともいう）である。『易』とは儒教の経典の一つで、いわゆる易者が筮竹（図1）を操って占いをする、あの「易占い」が基づく占断の言葉と理論が述べられた書であり、同時に古代中国の宇宙論・処世哲学を説いた書でもある¹。

その『易』の理論解説部分である繫辞^{ケイジ}上傳に、次のように「河図洛書」が登場する。

天,神物を生じ、聖人これに^{のつと}則る。天地変化し、聖人これに^{なら}效う。天,象を垂^{シヨウ}れて吉凶を見^たわし、聖人これに^{かたど}象る。河,図を出し、洛,書を出し、聖人これに^あ則る。



図1 筮竹(名畑所蔵)

つまり、天が示す気象や天体現象とともに、黄河から出現した「図」や洛水から出現した「書」などを手本として、聖人が「易」を作ったというのだ。その「図」とか「書」とかいうのが具体的にどのようなものであったのかまでは書かれていない。一般的なイメージを押さえておくため、漢和辞典の解説を掲げてみる(『全訳漢辞海』三省堂)。

【河図】周易に関する中国の伝説上の図で、易の八卦のもと。伏羲のとき、黄河から現れた竜馬の背に書いてあった図。伏羲はその図にもとづいて「易」の八卦を作ったという。

【洛書】伝説上で、禹王の時、洛水から出た神亀の背にあったという文書。

黄河や洛水といった河の中から現れた竜馬や神亀の背に画かれた図や文だ、というのがどうやら一般的なイメージであるらしいが、実はこれは「易」に附会して創作され流布された説であって、本来の姿はよくわかっていないのだ。

「河図」と「洛書」がセットで登場するという意味では『易』が最古の文献ではあるのだが、「河図」だけが単独で登場する文献となると、成立年代については様々な説があるものの、どうやらもう少し遡りそうだ。『易』と同じく儒教の経典の一つである『書経』顧命篇に云う、
陳宝・赤刀・大訓・弘璧・琬・琰、西序に在り、大玉・夷玉・天球・河図、東序に在り。

ここには、周王の宮殿に保管される様々な宝物の中に混じって「河図」が登場している。『易』に登場する「河図」と同様の図形と解釈する説の他に、宝玉類と

並んでいることから宝玉の一種だと解釈する説(元の俞琰・清の趙翼^{チョウヨウ}ら)や、「大訓」と同様の典籍で、地形を描いた地図が『山海経』のような地理書の類だと解釈する説(南宋の薛季宣^{セツキケン}ら)



図2 『山海経』の乘黄

などもある。また、『論語』子罕篇に云う、

子曰く、「鳳鳥は至らず、河は図を出ださず。吾已んぬるかな」と。

孔安国の注に「河図とは、八卦のことである」と解説するように、漢代にはすでに「易」に関連づけて解釈されていたようだが、本来の伝説としては、正体は不明ながら、鳳凰などと並んで、聖王が即位した時に現れる祥瑞のようなものと考えられていたと見られる。

他にも、春秋戦国時代に儒家のライバル的存在だった墨家の文献である『墨子』非攻篇下には「(天命が周の文王にくだると)河は緑図を出だし、地は乘黄を出だす」とあり²、同じく法家・道家系の文献である『管子』小匡篇にも「昔人の受命する者は、龍亀^{リウキ}^レ^ハ、河は図を出だし、雒(洛に同じ)は書を出だし、地は乘黄を出だす」とある。「乘黄」とは異獣もしくは神馬の名とされているから(図2)、それと並べられる以上は図形のような抽象物ではなく何らかの具体物であってもらいたいところだが、残念ながら詳しくはわからないというのが実情である。(現在のところ「宝玉の一種」と解釈する説あたりがやや有力視されている。)



図3

この「河図」が、「洛書」と組み合わせられて「易」の起源とされるようになったのは、あるいは、繫辞伝の著者が、「易」で重視される象と辞に対応させるべく、象の元になる「河図」の

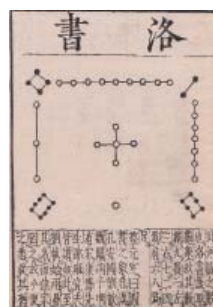


図4

1 「易」は陰・陽の二つの原理によって人間と自然を解釈する陰陽説に基づく占術で、筮竹の操作により、爻と呼ばれる陽(一)と陰(--)の2種の記号を組み合わせ、八卦(爻を3本重ねたもの。乾☰・兌☱・離☲・震☳・巽☴・坎☵・艮☶・坤☷)、六十四卦(八卦を2つ組み合わせたもの)を導き出して、その象(形状)と辞(占断の語)により占いをを行う。詳しくは『易経』・『周易』等の名で本学図書館にも翻訳が多数所蔵されているのでそれらを参照。読みやすさでは三浦国雄訳『易経』(角川文庫ピグナーズ・クラシックス)がお勧め。『易経』請求記号:123.1/E42m(本館所蔵)

2 『淮南子』俶真訓にも類似の文言があるが、こちらは「洛は丹書を出だし、河は緑図を出だす」と、「河図・洛書」のセットになっている。

伝説に合せて辞の元になる「洛書」を創作したのであるかもしれない³（恐らく同じ頃に書籍を指す「図書」という語も使われ始めたのだらう）。この推測の当否についてはともかく、その後、「河図・洛書」は緯書⁴の世界で経書と肩を並べるまでに地位を向上させるなど、時代を重ね様々な曲折を経て、宋代（10～11世紀）頃にはより具体的な「河図・洛書」像が提示されるようになる。宋代の学問を集大成した朱熹（朱子）の『易学啓蒙』『周易本義』にその図が採用されるに至り、これがその後の東アジアにおける「河図・洛書」像を決定づけることになったと言っても過言ではないだろう。それが左の画像である（図3・4、『周易経伝』より）。

何やら黒い点と白い点が線で結ばれた数珠状の記号のようなものが上下左右に並べられている。これが何を表現したものかという、白い点の集合は奇数、黒い点の集合は偶数を表している。「河図」の方は、中央に5と10、上に2と7、右に4と9、左に3と8、下に1と6が配置されているが、実はこの数字の配当は「五行思想」⁵と関係していて、1と6は五行の水、2と7は火、3と8は木、4と9は金、5と10は土を象徴する数なのである。水・火・木・金・土は方位でいうとそれぞれ北・南・東・西・中央に配当されるため、このような配置になっている。つまり「河図」は五行思想を図によって象徴的に表現したものといえるのだ。

一方の「洛書」は、3段3列に数が割り振られ、上段には右から2・9・4、中段には7・5・3、下段には6・1・8が配置される。これは、図の縦・横・斜めいずれの並びの3つの数字を足してもみな15になる、いわゆる魔方陣（魔法陣ではなく）である。これらの図から「易」の数理が導き出されることを朱子をはじめとする儒学者らは信じ、それを解明することが重要な哲学的、宇宙論的な課題とされていたのだ。

なお、この2つの図のどちらを「河図」と称し「洛書」と称するかについても諸説が出されていたのだが、朱子によりこの分け方に落ち着いた。特にこの「洛書」



図5『黄帝内経霊枢』の「九宮八風図」

の魔方陣については、「九宮」と呼ばれて古くから存在が認識され、その数の神秘性から「易」に留まらない様々な占いの理論の源泉とされて来ている。例えば、兵法家の必須知識とされた「奇門遁甲」の占術では、洛書九宮図に十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）から「甲」を除いた

九干を当てはめた九宮式盤を用いて占うし、医学書である『黄帝内経太素』や『黄帝内経霊枢』には「九宮八風図」が載せられ（図5）、その解説文から、現在は伝承の絶えてしまった「太一九宮占」の概要がわかるとともに、それが医学に応用されていたことも知られる⁶。「奇門遁甲」は系統から言うと兄弟のような関係にある「六壬」や「太乙」と並んで三式と呼ばれ



図6 羅盤(名畑所蔵)

（いずれも式盤という器具を用いる⁷）、古代東アジアにおける自然科学的教養の一角を成していたものであり、また特に「六壬」は日本の陰陽道⁸で主に用いられる占術として、日本の歴史においてかなりの影響力を発揮したものだといえる。

以上、「図書」という言葉の背後の世界について少々ほじくってみた。コロナ禍で出かけるのもままならない状況の中、「図書」をめぐる図書を紐解き、古代人の思惟の迹に思いを馳せてみるのも一興ではないだろうか。

3 繫辞伝の成立は戦国時代末期（紀元前3世紀頃）と推測されている。

4 「中国、前漢末から後漢にかけて作られた書物。経書に対するもので、易緯・書緯・詩緯・礼緯・楽緯・春秋緯・孝経緯など多種がある。儒教の経義に関連させながら予言・禍福・吉凶などを説いたもの。後世、儒家の思想を乱すものとして禁書となり、今日では、一部分だけが残る。」（『大辞泉』小学館）

5 中国古代において、宇宙・万物は木・火・土・金・水の5要素（五行）から成るとする考え。自然界・人間界の事象に五行を当てはめ、木は春・東・青・青竜、火は夏・南・赤・朱雀、土は土用・中央・黄・（?）、金は秋・西・白・白虎、水は冬・北・黒・玄武…のように、惑星・季節・方位・色・神獣などの様々な要素と関係づけられ、中国および周辺アジア地域の思想に大きな影響を与えた（詳しくは『五行大義』（中村璋八・古藤友子訳、明治書院）などを参照）。陰陽思想と結びついた「陰陽五行思想」については、「陰陽道叢書」「新陰陽道叢書」など陰陽道関係の図書も本学図書館に多数所蔵されているので、興味のある方はぜひ参照されたい。

6 猪野毅「奇門遁甲の基礎的研究」（『北海道大学大学院文学研究科研究論集』10号、2010年）、白杉悦雄「九宮八風図の成立と河図・洛書伝承—漢代学術世界の中の医学—」（『日本中国学会報』46集、1994年）などを参照。

7 現代でも風水師が用いる羅盤（図6）はこの式盤の流れを汲むもの。

8 易をはじめとする占術と自然科学的思考が複合した体系を「術数」と称する。東アジアにおける「術数」の文化については、水口幹記編『前近代東アジアにおける<術数文化>』（勉誠出版「アジア遊学244」2020年）などを参照。『前近代東アジアにおける<術数文化>』請求記号：302/A27/244（本館所蔵）

「図書館だより100号記念号」に寄せて

今回は100号記念号発行にあたり、お二人の先生に図書館を利用しての感想や思い出などを寄稿していただきました。

藤女子大学図書館と私 日本語・日本文学科 漆崎 正人

私の本学の着任が1985年4月なので、藤女子大学図書館（以下、「藤の図書館」）には、35年あまりお世話になっているわけですが、実は、本学着任以前の、大学院生時代から、活用させて頂いていたので、40年以上の利用歴があります。私の所属していた大学では、今は違うかも知れませんが、図書は、主としてそれぞれの講座予算で購入されるものの、文系は特に予算が乏しくて、蔵書が少なく、「藤の図書館」の専門書の豊富さを非常にうらやましく思ったものです。また、所属大学では、大学紛争時代に大学に送られてきた紀要や雑誌の多くが紛失しており、それらを「藤の図書館」で見ることができて、助かったことがしばしばありました。

というわけで、本学に赴任して以来、私の授業や研究は、「藤の図書館」の日本語学・日本文学の恵まれた蔵書に支えられてきました。さらに、私にとって幸運だったのは、藤女子大学がカトリックの大学なので、キリスト教関係の文献が充実しており、キリスト教の世界観・人間観・価値観などを踏まえて、研究のメインテーマであるキリシタン資料による日本語研究を進めることができているということです。

最後に、授業・研究に関して、他の研究機関で所蔵する、文献や資料の借り出し依頼や複写依頼などで「藤の図書館」の職員の方々に的確で敏速な対応をして頂いていることに感謝申し上げます。

図書館だより100号にあたって 人間生活学科 Sr. 木村 晶子

今回、図書館だよりが100号を迎えるそうです。それだけ藤女子大学の図書館は歴史とともにその役割を果たしてきたと感じます。

私も藤女子大学の卒業生ですが、藤大生としての自覚をもった一つとして、図書館の活用があります。高校時代とは比べ物にならないほどの蔵書量。膨大な検索カード。入学当初は圧倒されましたが、毎日、訪れるたびに本を探すことが楽しくなっていました。今とは違って、たくさんのカードの中から、お目当ての本を探すにはかなりの時間がかかりましたが、探している途中で、気になる本を見つけ、次々と興味が別の方向にも向けられてゆく楽しさがありました。地下書庫に潜ってゆくと、さらに探検気分が盛り上がり、上ったり下ったりを繰り返していたものです。

現在は、検索システムが整い、簡単に本や論文が見つかります。時間が短縮されるだけでなく、予約を入れるとその日のうちに届けてくれます。確かに便利にはなりました。しかし、デジタル化が進み、電子図書が増えてもやはり、「紙」のぬくもりがほしくなります。本の装丁や挿絵などに興味が惹かれます。残念ながら、最近では時間に追われ、ネット検索に頼って地下書庫をゆっくり探索するゆとりがない状況で、学生時代のあの貴重な時間がとても懐かしく感じるこの頃です。

学生の頃から今も変わらず資料収集や相談に快くご協力してくださる図書館員の方々に改めて感謝いたします。これからも、学生だけではなく、地域に貢献する図書館の活躍に期待したいと思います。



教員著作紹介

先生方に自著紹介をしていただきました。それぞれ所蔵館の教員著作コーナーに本がありますのでぜひご利用ください。



『異文化コミュニケーションの基礎知識
:「私」を探す、世界と「関わる」』伊藤明美著
大学教育出版発行 2020年8月10日 所蔵館:本館
文化総合学科 伊藤明美

本書(テキスト)は異文化コミュニケーション初学者にむけて書かれました。必要な基礎的知識はもとより、ワークショップ課題などとおして受講生自らが各章のテーマについて考える機会が提供されています。また、市販されているテキストにない視点として、対人コミュニケーションに介在する社会的勢力(パワー)の問題があります。この問題を抜きにして、異文化コミュニケーションの実態と課題およびその展望を探ることは困難だと考えるからです。本書を通じた異文化コミュニケーションの学修が、学生たちの「異文化感受性」を高めるとともに、現代社会における多様な人間関係の構築やその維持につながるコミュニケーションスキル向上の一助となれば幸いです。



列島の戦国史 8
『織田政権の登場と戦国社会』平井上総著
吉川弘文館発行 2020年11月1日 所蔵館:本館
文化総合学科 平井上総

本書は、日本の戦国時代を地域別・時代別に考えていこうという「列島の戦国史」シリーズのうち、織田政権の時代に絞って執筆した巻です。織田信長はかなり有名かつ人気がありますが、彼の人物としての個性に偏って注目されているのではないのでしょうか。そこで本書は、信長の人物伝ではなく、戦国時代の日本社会における彼の政権の位置付けについて、最新の研究成果をもとに読みやすい文体で執筆しました。各種の事件や戦いのほか、朝廷・室町幕府などの既存の権力や一向一揆・イエズス会などの宗教との関係、さらには楽市楽座、兵農分離、鉄炮などについて、過大評価も過小評価もせずに記したものになっています。



シリーズ・保育の基礎を学ぶ 3
『実践に活かす社会的養護 I』小川恭子、坂本健編著
ミネルヴァ書房発行 2020年4月30日 所蔵館:花川館
保育学科 / 子ども教育学科 小川恭子

皆さんは、「社会的養護」という言葉を聞いたことがありますか？
本来、すべての子どもは家庭で健やかに育つ権利がありますが、何らかの事情でその環境が奪われたとき、国が責任をもって養育環境を整備し自立に向けて支援をすることが社会的養護です。近年は、特に被虐待等の理由により家庭で生活をするのができない子どもや、家庭にいらながらも何らかの支援を必要とする子どもが増えています。本書はこのような社会的背景を反映し、社会的養護を担う保育士に必要な基礎知識を盛り込みました。社会的養護を必要とする子どもたちを取り巻く状況や必要とされる支援について学びを深めて頂ければ幸いです。なお、2021年10月には「実践に活かす社会的養護 II」を出版の予定です。本書の内容をより深く理解するためにも、I(理論編)とII(実践編)をあわせて活用されることを願っています。

大学(藤学園) & 図書館、図書館だよりの歴史

1975年に図書館だよりが発行されてから、46年。今回100号を記念して、大学(藤学園) & 図書館、図書館だよりの歴史を振り返ってみようと思います。大学の歴史は、大学のホームページに沿革が詳しく載っているのでこちらもぜひチェックしてみてください。図書館だよりのバックナンバーは図書館ホームページからもご覧になれます。また製本したのも利用出来ます。当時の図書館の様子(1度に借りられる冊数が今より少なかった!?本を自由に手に取って見ることが出来なかった!?手荷物を持って入れなかった!?など)を知ることもできます。

* 図書館の歴史は、「図書館の30年」(図書館だよりNo.12、No.13)にも掲載があります。

- 1925年(大正14) 札幌藤高等女学校開校(5年制)
- 1947年(昭和22) 藤女子専門学校開校(3年制)
- 1950年(昭和25) 藤女子短期大学開学(藤女子高等学校校舎内に図書室設置)
- 1961年(昭和36) 藤女子大学開設 図書館設置
- 1968年(昭和43) 新図書館開館(5月20日)
- 1975年(昭和50) 「図書館だより」創刊(6月) B5サイズ



▲1968年 本館 閲覧室



◀1975年頃 本館 閲覧室



▲創刊号

当時の図書館長 伊藤政雄先生の巻頭言に「学生と図書館との関係をより一層密にし、より多く図書館を利用してもらう目的で、広報的色々な図書館の紹介ばかりでなく、新刊書の書評とか、先生方や学生の文も載せて楽しい内容の「図書館だより」を出すことになったのである。」と創刊理由が記載されています。

- 1981年(昭和56) 全開架方式採用(書庫の資料も自由閲覧可) 入退館時の学生証の提示不要に
- 1983年(昭和58) 入退館装置(BDS)設置
- 1984年(昭和59) 卒業生へ本の貸出開始
- 1986年(昭和61) 23-25号 既刊号(1-22号) 内容案内掲載
- 1992年(平成4) 花川に人間生活学部を開設 花川館開館(5月1日)



▲1979年 本館 目録カードケース



▲1983年 本館 入退館装置

- 1996年(平成8) 図書館検索システム公開(目録カード検索からオンライン検索(OPAC)へ) 50号! 既刊号(23-49号) 内容案内掲載
- 1997年(平成9) 52号 フルカラーページ初登場



▲1991年 花川館 工事中



▲1992年 花川館 閲覧室

- 2000年(平成12) 2学科(文化総合学科、保育学科)新設 2学部6学科へ 花川館3階リニューアル(スペース、書架増設) 本館レイアウト変更(カウンター位置変更)



▲50号



▲52号



▲花川館 3階



▲2000年頃 本館 カウンター



2001年(平成13) 本館 地下集密書庫(旧食堂跡)オープン
59号 サイズ変更(B5→A4)



▲59号



▲本館 地下集密書庫

2002年(平成14) 大学院人間生活学研究科
(人間生活学専攻・食物栄養学専攻)を開設

2003年(平成15) 入退館装置(BDS)変更 入館時に学生証が必要に

2005年(平成17) 70号 デザイン変更

2006年(平成18) 72号 図書館員のオススメ本 連載スタート
*84号(2012.10)まで計13回掲載

2010年(平成22) 「図書館キャラクター」募集(9-11月)
コンテスト開催(12月)

2011年(平成23) 81号 デザイン変更(きしんさん登場)

2012年(平成24) 84号 全ページフルカラーへ



▲81号



▲70号



▲2014年 本館リニューアル(カウンター)

2013年(平成25) 85号 図書館資料Navi 連載スタート

2014年(平成26) 講堂棟耐震改修工事(図書館棟)
本館リニューアル(事務室統合、地下保存庫に集密書架設置)

2015年(平成27) 本館1階 ラーニング・commonsオープン

2016年(平成28) 91号 デザイン変更(現在のデザインに)
「学生選書ツアー」初実施



▲91号



▲2015年 本館 ラーニング・commons

2017年(平成29) 花川館のエリア分けスタート
(アクティブ・ラーニング・エリア開設)
図書館学生スタッフ「LiSt」の活動開始
94号 LiSt活動報告 連載スタート



LiSt着用 エプロン▶



▲2017年 花川館 アクティブ・ラーニング・エリア

2018年(平成30) 北海道胆振東部地震発生(9月6日)
大学(図書館含む)全停電 臨時休館(9/6~9/8)
図書館内の被害(本の一部落下、施設の一部破損)



◀2018年
本館 一部本が落下



2020年(令和2) 子ども教育学科開設
新型コロナウイルス感染症拡大に伴い非対面授業の実施
図書館は臨時休館や開館時間変更、感染拡大防止のため
一部利用制限実施

2021年(令和3) 100号記念号発行

2025年(令和7) 藤学園創立100周年



▲2020年 花川館 カウンター飛沫防止対策

図書館だよりは、2021年度から年1回発行となります。今後は図書館だよりとは別に、LiStが中心となって情報を発信する予定です。こちらもお楽しみに！

きしんさん 誕生10周年!!

図書館キャラクターきしんさんは、2020年で10歳になりました。

2010年、図書館キャラクターを学生のみなさんからの公募で決めることになり、当時、日本語・日本文学科3年生のYさんの作品が選ばれました。

応募の際のコンセプトには、「花とつぼみがモチーフです！好奇心のつぼみが花開くイメージをキャラクターにしてみました。」と書かれていました。

きしんさんの「きしん」は好奇心の「きしん」なんです。知ってましたか？

こうしてデビューしたきしんさんは、図書館だよりもちょうど10年前の81号（2011.4）から登場しています。

これまでに、雨や雪の日に図書館の貸出本を入れるためのビニール袋や、本の葉、クリアファイルなど、いろいろなグッズにもなりました。

今では、図書館を飛び出して学内のあちこちで活躍しています。みなさんも、一度はどこかで会ったことがあるのではないのでしょうか？今後も活躍の場を増やしていきたいと思っていますので、これからもきしんさんをどうぞよろしくお願いいたします！



● 編集後記 ●

「図書館だより」100号を無事発行することができました。

巻頭言では、前図書館長でもいらっしゃいます、日本語・日本文学科名畑嘉則先生に「もう一つの「図書」のこと」と題し、ご寄稿いただきました。「図書」という言葉の背後に潜む豊かな世界についてご紹介いただいています。まさに100号記念号にぴったりの内容で書いていただきました。みなさんにもじっくりと読んでいただければと思います。

創刊してから46年、「図書館だより」も図書館と共に歩んで来ました。今回振り返ってみて、本当にたくさんの方々にご協力をいただき、「図書館だより」は出来上がってきたのだということを改めて感じました。この場を借りて、今まで携わってくださったすべての方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。これからも色々な情報を発信して行きたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。(K)

100号記念号が発行となりました！

たくさんの教職員の方々、学生のみなさんに支えられ、協力していただき100号を発行することができました。本当にありがとうございました。

図書館だよりを改めて1号から読み返してみると、貸出冊数・期間が違ったり、延滞金(!)があったりと、その時代の図書館や大学の雰囲気を感じることができました。簡単に年表形式で紹介しましたが、興味を持った方は図書館だよりのバックナンバーを読んでみてください。

現在はまだ新型コロナウイルス感染症拡大防止のための自粛生活で思うようにならない日々が続いていますが、図書館には学修や研究、趣味の本などたくさんの資料があります。ぜひ図書館を有効活用してください。(W)



スマートフォンでは
アプリを利用でき
ます

図書館キャラクター
「きしんさん」

藤女子大学 図書館だより 第100号 2021.3

発行者 藤女子大学図書館 札幌市北区北16条西2丁目

TEL 011-736-5407 FAX 011-709-4770

<http://www.fujijoshi.ac.jp/library/>